

扉のありか



本屋さんをやりたいのだけれど、と言うと、ふたりはすぐに、いいね、一緒にやりたいと言ってくれた。高校時代の同級生で、一緒に強豪チアリーディング部の厳しい練習の日々を乗り越えてきた仲間だ。

比留川香さんは七年半勤めた会社を辞め、ちょうどあたらしいことに挑戦しようとしているところだった。秘書として働くなか、上司に贈った万年筆がきっかけで文房具に目覚め、「文房具応援団長」という名刺をつくって活動していた。本屋をやるなら本だけでなく文房具も取り扱う店にしたいと思い、比留川さんに相談してみた。タイムトラベル専門の本屋さん、というアイデアもおそろおそろ打ち明けると、「文具でもタイムトラベルは可能だよ」という返事が返ってきた。当時の私にはその言葉が真に意味するところまではわかっていなかったが、なん

だかものすごく頼もしく感じたのを覚えている。

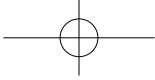
なかいかおりさんは絵本作家だ。広告会社に勤めながら休日に絵を描く日々だったが、次の春から子ども関係の仕事に転職するつもりだと言った。ただ作品を作っているだけでなく、子どもたちにとって絵本という存在がどうあるべきか、常にまじめに考えている彼女ならではの判断なのかもしれない。私はなかいさんに絵本を数冊、選書してもらいたいと考えていた。平日も休日も忙しそうな彼女にそれ以上の協力をあおぐのは不可能かと思ったが、実際は高校時代から変わらないうえに、発想力と持ち前の要領の良さで、店のデザインを全て担ってくれることになる。

私は、思えばずっと本屋さんになった。本屋という仕事にも興味があったけれど、それよりきつと、「本屋さん



みたいな人」になりたかったのだと思う。大学在学中からタレントとして活動してきた。タレントとは、実体的ない不思議な言葉だ。旅番組のレポーター、司会、語学番組の生徒役、歌手、ラジオペーソナリティー、エッセイの執筆などなど、多種多様な仕事をしてきた。悪気なく、いろいろやっているけど結局何がやりたいの、と言われることもある。身も蓋もない言い方だが、なんでもやりたい。知識として知っていること、実感として知っていることは全然違うと思う。何かをやってみて発見したことを伝えるのが好きで、それができるなら方法はなんでもいい。職業は目的じゃなくて手段だ。二十代後半になると、さらに自分の役割が明確になってきた。私の役割のひとつは、門外漢として対象に関わることだ。たとえば、北海道で十年近く旅番組などに出演しているが、北海道出身ではない

ことが逆にいいと思う。地元の人には当たり前すぎて気づけない面白い部分を新鮮に発見することができるからだ。また、国際協力NGOを取材して本を執筆しませんでしたと誘われたときには、最初はそんな高尚そうなこと自分にはできませんと断った。でも、国際協力活動をする人イコール自分とは違う偉い人、という思い込みを壊す作業そのものが、同じように距離を感じている人たちの心のハードルを下げると評価してもらい、自信がついた。ゼロから体験し、面白さを発見することで、まだ興味を持っていない人に扉のありかを伝える仕事。それが私の役割かもしれないと思うようになった。本屋にはたくさんさんの扉がある。全く知らなかった新しい世界と出会える場所だ。私はそんな、世界との出会いの入り口にいたい。本屋は自分の理想とする生き方と相似形なのだ。



タイムトラベルをテーマにしようと思っただのは、時間が関係するSF小説が好きだったのももちろんあるが、縄文時代を好きになったことや、アジア・太平洋戦争の記憶についてのドキュメンタリー映画の制作に関わるなかで、日常的なかのタイムトラベル性を意識するようになったからだ。タイムトラベルが現実にあるとしたら、それは過去や未来への感受性のことなのかもしれない。SFはもちろん、時間を感じられる本を幅広く取り扱ってみたい。

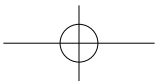
十八歳でチア部を引退してから十二年が経ち、みんな三十歳になった。高校卒業後、それぞれの人生が展開していくなか、三人のタイミンがまたばつちり揃って一緒に本屋を開くことができるのは、奇跡的なことだと思う。

だけど、やりたいだけで本当に本屋ができるのか。しかも、こんなに街の

本屋がどんどんなくなっていつているなかで、素人の私たちが。

二〇一八年
十一月十四日

初めてのミーティングは、神保町のブックカフェでおこなうことになった。カフェでふたりを待つ間、私はひとり震えていた。言い出しっぺとして、ふたりに本屋開店のイメージをプレゼンできるかどうか緊張していた、わけではない。入り口に近い席で、時々入ってくる秋の風が冷たかったのだ。寒がりなのは私だけで、ふたりは到着するとすぐに上着を貸してくれた。私はゴール直後のマラソン選手のように上着でぐるぐる巻きになりながら、あらためてタイムトラベル専門書店の構想と具体的な仕入れの方法な



どについて話した。本の仕入れには、大阪屋栗田の新サービス「Joye」を主に利用しようと思っっていること。ギャラリーやレンタルスペースを借りて、まずは期間限定で開店したいと思っっていることなど。友達同士で仕事をするのは、とびきり楽しいがリスクもある。事務所経由の芸能活動以外にも、バンド活動や自分が主催の企画などを何度かやっていく上でそう感じていた。親しい仲だからこそその気の緩みがだんだん大きなずれとなり、もともと友人関係にもヒビが入ったら悲しい。ふたりがやりたくないと思うことは決して無理にやらなくていいし、お金のことも最初からしっかり話したいと思った。役割分担は必要だけど、自分がやりたいと言いついたのだから押し付けることはしたくない。せつかくチームになれそうなのに、想いが先走りすぎて、ついていけないと思わせるのも嫌

だ。そう考えて、慎重に、少しずつ話していった。しかし、なかいさんはそんな話言わなくてもわかるよという風な顔で、リュックから資料を出してテーブルの上ですつと置いた。それはすでに実在する本屋さんの看板の写真をとにかくたくさん集めたものと、私たちがはじめようとしている本屋さんの名前の候補がいくつも書かれたものだった。ついていけないよと思われるどころか、何歩も先をいつていたのだ。タイムトラベルというコンセプトも、私がまだ整理できていない部分まですでに理解してくれていた。ああ、仲間っていいな。

なかいさんが挙げてくれたお店の名前の候補には、「時空屋」「歳月堂」「タイムトラベルブックス」「時の宮」「時旅箱」「うとうと堂」などがあつた。まず時間に関する単語を調べ、「堂」「屋」「ブックス」などお店の名前として収ま

りが良くなる単語と組み合わせたのだという。広告会社勤務経験、ここに極まれり。私は感心して何も言えなくなっていたが、比留川さんがすぐに「うとうと堂がかわいいっ」と言った。比留川さんは普段からいとおしいものをいち早く見つける人だ。なかいさんに「うとうと堂」の由来について詳しく聞くと、烏兔という言葉がもたっているのと教えてくれた。太陽にはカラスが、月にはウサギがいる、という中国の伝説があり、烏兔は歳月という意味の言葉らしい。なにそれ、素敵じゃん。ロマンチックじゃん。動物いるし。動物はいいよね。比留川さんと私はこの言葉がすっかり気に入り、うっとりした。どんな店なのかわかるように、タイムトラベル専門店と頭につけ、バランスを考えて小文字で unoto、とした。こうして、タイムトラベル専門店 unotoの運命は動き出した。

わたしたちの
貝塚

ふたりに上着を借りてもまだ寒かった私は、食後にホットチャイを注文した。内側から温まり、やっと身体がほぐれた気がした。三人でホットドリンクを飲みながら、私たちもお店でドリンクを販売したいよね、という話になった。本や文房具の売り上げだけで小さな店をやっていくのは厳しそう、という不安もある。そこで、比留川さんと私がふたりで食品衛生責任者の資格を取りに行くことになった。なんでも、国家資格なのに、受講料の一万円を支払い、一日講習を受ければ誰でも簡単に取れるらしい。比留川さんと私は「あの青いパネルに名前を書けるのがかっこいい」という幼稚なモチ



ベーションで講習にのぞんだ。

半日におよぶ講習は、講習というよりほとんど、脅しだった。世の中にはこんな食中毒があります。こんなウイルスもいます。生ものはこんなに危険です。特に生牡蠣の危険性は繰り返し語られ、途中で見せられたビデオのなかでも出演者が「生牡蠣が好きな人は……あぶない、あぶない」というセリフを言わされていた。よりによって生牡蠣が大好物である比留川さんと私は何度も責められている気分になり、肩身が狭くなった。

講習の最後には小テストがあった。テストと聞くと学生時代を思い出して途端に緊張する。テストは全部で数問しかなく、まじめに講習を受けていた我々は全問正解することができた。もしかして天才かもしれない、とふたりで盛り上がっている、今回のテストの全問正解者率は八七パーセントです、とアナウンスさ

れた。約九割の人が全問正解……。天才だとはしゃいだ自分はずかしくなった。念願の青いパネルを購入し、食品衛生責任者手帳も受け取り、無事に資格を取ることができた。帰り道、ふたりで、「生牡蠣好きでわかったね……」とぶつぶつ言いながら歩いた。しかし、根は真面目なので、食品衛生への責任感もしっかり培われたと思う。きつと。

後日談。あんなに脅されたあとも、比留川さんの誕生日に牡蠣柄のバッグをプレゼントするなど、我々は懲りていなかった。ある日、比留川さんから牡蠣食べ放題一五〇〇円のお店を見つけたから行こうと誘われ、ふたつ返事ででかけて行った。しかも真夏、食品衛生的にはもったも危険が高まる時期である。開店一番でオイスターバーに入店するなり、比留川さんはお店の人にむかって元気よく「たくさん食べますけど大丈夫です